

Fran O'Rourke

*Pseudo-Dionysius & the Metaphysics of Aquinas*

E. J. Brill, Leiden/New York/Köln 1992

加藤和哉

(擬)ディオニシウス文書 (Corpus pseudo-Dionysiacum) が中世スコラ学に与えた広範な影響については改めて指摘するまでもないだろう。トマス・アクィナスもまた、『神名論 (*De Divinis Nominibus*)』について注釈を書いているのみならず、他の著作においてもしばしば、これを使徒的権威を持つ書物として引用している。本書は、これがトマスの哲学・神学に与えた影響が、これまで考えられてきたよりも大きく深いものであり、存在の本性、存在するものの階層秩序、神の本性、創造論といったトマスの存在論一形而上学の「中心的問題」(p. xiv) の全体に及ぶものであることを、包括的な文献研究に基づいてあつづけようとするものである。

トマスの存在論の核心にまでおよぶディオニシウス文書の影響を見て行くにあたって、O'Rourke は、Cornelio Fabro によってトマスの存在理解の特徴を現すものとして用いられた「内実ある存在 (*esse intensivum, the intensive character of esse*)」(p. 155) という概念を用いる。すなわち、トマスにおいては、神が存在そのものであると言われ、また万物がこの存在を分有することによって存在するとされる場合の「存在」(*esse*) とは、存在するものの本質 (*essentia*) と区別される単なる実在 (*existere*) ではなく、存在するものあらゆる完全性を包摂するようなものとされる。このような存在理解をどのようなものとするかは、トマス解釈の中心的課題であり、多くの先行研究があるが、Fabro はこれを「内実ある存在」と呼び<sup>1)</sup>、ディオニシウス文書に関係づけて論じた。本書は、Fabro の研究をふまえつつ、より幅広い文献研究に基づいて独自の解釈を加えて、トマスの存在理解と形而上学に対するディオニシウス文書 (以下、D) の影響を明らかにしようとするものである。

全体は、Ⅰ 神の知、Ⅱ 有と善の超越、Ⅲ 超越の原因と現実存在、Ⅳ 善の創造的流出と題された四部からなり、D のテキスト、トマスの D 注釈、さらに他の著作を比較対

照しながら、きめ細かな分析が展開される。第Ⅰ部では、神認識の方法およびその可能性・根拠の問題を中心に、Dの考えの整理（第1章）とトマスの考えとの突き合わせ（第2章）がなされている。主な論点の一つとして、肯定・否定・超越という神認識の「三つの道」（*triplex via*）についてだけ触れておくと、トマスは、Dの肯定・否定の道の区別、および否定の道の優越性を基本的に受け入れているが、ただ、否定の道において、そもそも神に当てはまらない属性が完全に否定し去られる場合と、ある種の完全性（たとえば生命や知恵）について、それらが被造物的な有限性を含意する限りでは否定されるが、この否定を通して、むしろそれが無限に神に属することが示される場合とを区別し、後者を超越の道としたとされている（p. 34-35）。

第Ⅱ部では、トマスとD（より一般的には（新）プラトン主義）とを隔てる特徴とされてきたことがら、すなわち、トマスにおいては、存在が神の第一の名であるとされるの対して、（新）プラトン主義においては、存在は万物の究極の根拠（「一」*τὸ ἓν*; *unum*）から万物に与えられる最初のものに過ぎず、根源的「一」は存在をも越える「善」とされることが論じられる。ここでは、「善」および「存在」のそれぞれについて、（新）プラトン主義の伝統に立つDの理解（第3章）を整理し、アリストテレスに多くを負うトマスの理解と比較検討している（第4章）。ここで、O'Rourkeの解明の鍵になるのは、両者の見かけの違いにもかかわらず、トマスがDに注釈を加えるにあたり、この点に関して必ずしも困難を覚えておらず、自らの立場とDの立場を整合的なものとみなしているということである。解釈の要点をまとめれば、Dの主張のうち、神が存在を越えており、むしろ「非存在」であるということについては、トマスはこの「存在」を被造物における「実在」（*existentia*）とみなすことで、これに同意し（p. 94-95）、一方、「善」が神の第一の名であるという主張については、アリストテレスの現実性（*ἐνεργεῖα*; *actus*）理論と「善」の概念（善は万物が求めるものである）を参照しつつ、「善」という名は、存在こそが万物の求める第一の現実性であるということから、存在そのものである神に与えられたものであると解しているというものである（p. 89; 100）。

こうして、Dとトマスとの間に横たわる溝というものを（少なくともトマスの側から）埋めた上で、O'Rourkeの中心的論点が扱われるのが第Ⅲ部であり、内容的にも分量的にもこれが、本書の論究の頂点をなすと思われるので、やや詳しく紹介しておく。まず、トマスはDから「内実ある存在」の概念を受け継いだ、あるいは少なくとも

も、Dの思索を参照しつつこれを展開したという主張の前提として、次のようなD解釈が提示される(第5章)。すなわち、存在は、根源的「一」そのものではなく、これから万物にもたらされる第一の完全性であると考えた点では、確かにDは(新)プラトン主義の伝統に一致し(またトマスを離れ)ているが、一方で、万物のうちに見られる多様な完全性それぞれの根拠として複数の原理(諸イデア)をたてず、世界の多様性が根源的「一」(=神)から直接もたらされると考え、また存在こそこれを媒介するものとするので、「存在のうちに含まれる内実ある豊かさという独特な考えに到達している」(p. 117)というのである。

ついで、トマスがまずさしあたり、Dの考える万物の第一の完全性としての存在を、それぞれの被造物の「存在の現実性 (*actus essendi*)」、万物に「共通の存在 (*esse commune*)」として理解したということが明らかにされ<sup>2)</sup>、またその一方で、この同じ「内実ある存在」という存在理解の延長線上で、どのようにして、被造物の存在とは区別される神の存在についても考えることができたかが解明される(第6章)。解釈の出発点はトマスの多く著作<sup>3)</sup>に見られる「量・空間としての大きさ」(*quantitas dimensiva*)と「力量の大きさ」(*quantitas virtualis*)という区別——前者は、拡がり (*extensio*)、後者は内実 (*intensio*) ないし完成度 (*perfectio*) に応じて考えられることから、それぞれ「拡がりの大きさ」(*quantitas extensiva*)、「内実の大きさ」(*quantitas intensiva*)とも呼ばれる——である<sup>4)</sup>。そして、存在するものの内実の大きさ——それは存在の現実性、形相ないし本性、働かないし現実活動という三つの側面で捉えられる (p. 162) ——は、「存在の完成度」(*perfectio essendi*) ないし「存在の力量」(*virtus essendi*) として捉えられ、他方で、神は、あらゆる存在の完成度、無限の「存在の力量」をもつ存在として考えられることになる。

O'Rourkeによれば、この「存在の力量」という概念は、多くの解釈者によって見過ごされてきたものであり (p. 167)、またトマスの存在理解の核心におけるDの影響を見て取るにあたって重要なものでありながら、Fabroによっても十分に扱われなかったものである (p. 166)。この概念を媒介として、単に被造物の存在に関する限りでDとトマスの存在理解が合致するのが見いだされるだけでなく、神が「存在の力量」を無限なる仕方でもつするという考えについても、トマスはDに典拠を求めることができたのである (p. 159-160)<sup>5)</sup>。このあたり「力量の大きさ」「存在の力量」、さらに能力の完成としての「力量」(=徳) といった文脈を異にする概念をつないでいく

O'Rourke の解釈は見事である。こうして、O'Rourke は、存在を現実性と考える点でトマスがアリストテレスにも依拠していることを認めつつ、まさにその存在の内実は、(新)プラトン主義から与えられたのだと考える (p. 174)<sup>6)</sup>。このことは、さらに(新)プラトン主義の伝統に由来する「存在する、生きる、理解する」(esse, vivere, intelligere) というモチーフによって確認される (p. 174ff.)。

そして、このような存在理解に基づいて、第 II 部で扱われた神における存在と善との関係について、トマスが D にどのように解釈を施した上で、自分の立場と整合的であるとみなしたかが論じ直されている (第 7 章)。ここでは、D が神性を善としてこれに帰したことから、神の一性、単純性、完全性、超越性などが、トマスによって、「自存する存在そのもの」(Ipsum Esse Subsistens) の性格として取り込まれていることが確認される。

第 IV 部では、残る論点として、(新)プラトン主義における根源的「一」からの「流出」(πρόοδος; exitus) と「帰還」(ἐπιστροφή; reditus) のモチーフが、まず D において概観され (第 8 章)、ついでこれがトマスにどのように受容されたかが論じられる (第 9 章)。具体的には、神の善のあふれとしての創造、被造物の流出と帰還の構造、作用因としての神と目的因としての神、創造の自由、神の内在と超越、被造物の階層秩序といったものが、トマスにおいて D の影響が見られる要素として扱われる。

以上見てきたような包括的な研究の全般にわたって評価を加えることは、論者の能力を超えている。O'Rourke の手法が、手堅い文献的な作業に支えられているだけに、その一つ一つについて個々に検証してみることなしには、全体の適切な評価もできないと思われるからである。以上で紹介したいいくつかの論点については、O'Rourke の議論は説得的であり、少なくともより詳細な吟味に値するものであると思う。その一方で、O'Rourke も認めているように、トマスにとっては、やはりアリストテレスが形而上学的真理探求の方法を与えたものである (p. 276) とすれば、アリストテレス形而上学およびこれに対するトマスの注釈の創から、本書の議論を検証してみることも必要であろう。さらに、本書においては、同じ(新)プラトン主義的伝統に属する文書として補足的に言及されるにとどまっている『原因について (De Causis)』およびそのトマスの注釈との関連も (これがアリストテレスの名のもとに流布していたものであるだけにいっそう) 興味深い。

## 註

- 1) Cornelio Fabro, *Participation et Causalité selon S. Thomas d'Aquin*. Louvain: Publications Universitaires, 1961, p. 253, n. 18. O'Rourke によると、この表現は、*De Veritate* q. 29, a. 3 でトマスが用いている *albedo intesive infinita* という表現から考えられたものである。詳細については、本文後段参照。
  - 2) O'Rourke は、「存在自体 (*αὐτὸ εἶναι*) は、より先にあるもの (*πρῶτον*) に由来するのであり、存在はこのものに属するが、このものは存在に属さず、存在はこのものうちにあるが、このものは存在のうちにはない」という『神名論』の箇所 (5, 8, 279) の「存在自体」(*αὐτὸ εἶναι*) に対するサラセヌスの訳語 *ipsum esse* にトマスが *commune* を加えて、この箇所を「共通の存在自体 (*ipsum esse commune*) は、第一の存在するもの、すなわち神に由来する」とパラフレーズしている (*In de Divinis Nominibus*, V, ii, 660) ことに注目している (p. 141-142)。
  - 3) O'Rourke が扱っている主な箇所をあげれば、*In I Sent.*, 17, 2, 1 ad 3; 18, 2, 1, *Solutio et ad 2*; 19, 3, 1; *S. theol.*, I, q. 42, a.1 ad 1; II-II, q. 24, a. 4, ad 1; *De Veritate*, q. 2, a. 9; q. 8, a.2; q. 20, a. 4 ad 14; q. 29, a. 3; *De Potentia*, q. 1, a. 2.
  - 4) たとえば、無限な白い物体 (*corpus album infinitum*) における白さは、拡がりの点で (*extensive*) は無限であるが、もっと白いものが考えられるという意味で内実においては (*intesive*) 無限ではない。 *De Veritate*, q. 29, a. 3.
  - 5) O'Rourke があげる箇所としては、*De Malo*, q. 16, a. 9. ここで、トマスはこの考えを神名論第 5 章に関係づけている。
  - 6) このようなアリストテレスと D の結びつきを、トマスにとって可能にしたものとして、O'Rourke は、モルベッカのギレルムスによるアリストテレスの翻訳において、*ἀρετή* が *virtus* と訳され、一方で、サラセヌスによる D の翻訳で、*δύναμις* が同じく *virtus* と訳されたことを指摘している (p. 186)。
-